慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ジョン・ パトンの訪日日記(1947年) (上)
Sub Title	John Paton's diary in Japan (1947) (I)
Author	松村, 高夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1993
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.86, No.2 (1993. 7) ,p.277(137)- 294(154)
JaLC DOI	10.14991/001.19930701-0137
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19930701-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」86巻2号（1993年7月）

資　料

ジョン・パトンの訪日日記（1947年）

——（上）——

松　村　高　夫

以下に示す日記は，1947年10月12日から11月6日にかけてマッカーサーの招待により訪日したイギリス議員代表団5人のうちのひとり，ジョン・パトン（John Paton）の手稿である。他の4人はゴードン・ラング（Gordon Lang），ハーヴェイ・ローズ（Harvey Rhodes），スタンレイ・プレスコット（Stanley Prescotte），ウィリアム・ティーリング（William Teeling）であった。(1)

一行は10月3日にイギリスを発ち，日本に来たあとは韓国，香港，シンガポールに行き，12月22日にイギリスに帰国している。(2) パトンの手稿は，イギリスのミッドランドの労働史家エリック・テイラー（Eric Taylor）博士により発見・入手され，私はそのなかの訪日日記の部分の和訳・公刊を博士から依頼された。

ジョン・パトンの略歴

まず，ジョン・パトンとはいかなる人物であるか，テイラー博士の書いた略歴をもとに紹介しよう。パトンは1886年，スコットランドのアバディーンに生まれた。かれの父親はパン屋だったが，ジョンが2歳になるまえに家族を捨てたので，生計維持は母親の肩にかかった。アバディーンに小売店をもっていた彼女の両親が協力した。ジョンは地元の小学校に通い，12歳で卒業したが，その後はオクスフォード大学のラスキン・コレッジ（Ruskin College）の通信教育課程や労働者教育協

注（1）ラングはStalybridge & Hyde選出の労働党議員（1945年－），法制委員；ローズはAshton-under-Lyne選出の労働党議員（1945年－），商工業委員；プレスコットはDarwen（Lancashire）選出の保守党議員（1943年－），商工業委員（綿業），ロンドンのシティーのフリーマン；ティーリングはBrighton選出の保守党議員（1944年－），外交問題委員（*Who's Who in Parliament* による）。

（2）パトンの極東訪問日記は1947年10月3日から12月22日までつけられているが，その内容はつぎのとおりである。10月3日－10月11日　イギリスから海路で日本へ；10月12日-11月6日　日本滞在；11月7日-8日　韓国滞在；11月9日-11日　空路香港へ；11月12日-23日　香港滞在；11月24日-27日　船でシンガポールへ；11月28日-12月2日　シンガポールとペナン滞在；12月3日-22日　船でイギリスへ。

（3）John Paton, *Left Turn!*, 1936, p. 391, quoted in Eric Taylor, typescript re John Paton 5pp. (1978).

会（Workers' Educational Association）で学んだ。前者は1899年に，後者は1903年にできた労働者教育の機関である。理髪師になったジョンは，『クラリオン(*Clarion*)』を読んで社会主義に関心をもつようになり，資本主義は「混沌とした不条理な混乱状態ともいうべきもの（a chaotic and absurd muddle）[3]」であると確信するにいたった。かれは，独立労働党（Independent Labour Party : ILP）と店員組合（Shop Assistants' Union）に加入し，こうして生涯にわたる社会主義運動との関わりがはじまった。

ILPへの加入後間もなく，かれはアバディーンからグラスゴウに移ると，数年間はそこで義歯の販売やミルクの販売もおこなって生計をたてた。一時，ILPの指導者の戦闘性欠如に失望してアナーキストのグループに入ったが，アバディーンにもどると再び理髪師となり，ILPに再加入した。間もなく第1次大戦がおこると，徴兵検査で足首が弱く難聴のため兵役には不適当と判定され，そのため政治活動に没頭できるようになり，ILPのアバディーン支部やスコットランド北部連盟の指導者になった。

戦争がおわると理髪師を辞め，ILPのスコットランド北部の専従オルガナイザーになり，さらに1920年にはスコットランド全域の責任者になり，以後4年間その任務を続けた。その間2度の総選挙ではILPから立候補したが，ともに破れている。しかし，かなりの数の得票を集め，1923年に南アバディーンから立候補したときには，自由党に次いで2位に入ったほどだった。

1924年，かれはILPの全国オルガナイザーに任命されると，本部のあるロンドンに移住した。3年後にはILPの総書記となり，1929年から31年まで党機関誌『ニュー・リーダー（*New Leader*）』の編集者も兼ねた。このようにパトンは，ILPが1932年に労働党を離脱するまでの時期の重要な人物だったのである。労働党から離反した「新しい」ILPにかれが期待したのは，共産党にたいする「活動的な断固とした反対（active and determined opposition）[4]」であったが，事態は期待とはまったく異なる方向に進んだ。ILPと共産党は多くの場で協力したし，1933年には両党間の「日々の協力（day-to-day cooperation）[5]」が同意された。パトンはこれに強固に反対してILPの書記を辞任し，数カ月後にはILPも離党した。

ILPの書記辞任後，パトンは死刑廃止全国評議会（National Council for the Abolition of the Death Penalty）の書記になり，また，刑罰改革ハワード連盟（Howard League for Penal Reform）の執行委員となり，『刑罰改革者（*Penal Reformer*）』の編集者にもなった。1930年代半ばにかれは2冊の自伝，*Proletarian Pilgrimage*（1935）と*Left Turn!*（1936）を出版した。そして間もなく労働党に加盟する。

1938年かれはノリッジの労働党候補になるが，第2次大戦勃発のため総選挙は1945年まで延期された。45年の総選挙ではノリッジから労働党2人が当選した。下院議員になったパトンは外交問題の専門家として評価されるようになり，1947年の日本訪問の議会代表団のひとりに選ばれたのである。

パトンはノリッジ選出（1950年にこの選挙区は2つに分割され，かれはノリッジ・ノース選出となる）の労働党議員として，高齢と病気

注（4） *Ibid.*, p. 393.
（5） *Ibid.*, p. 427.

のため引退する1964年まで活躍したが，この間とくに関心を寄せたのは外交問題と刑罰改革である。かれは1972年までウェルヴィン・ガーデン・シティに住み，その後，妻の親戚が住むウルヴァーハンプトンに移り，そこで1976年に90歳で亡くなった。パトンの再婚相手のフローレンスも労働党の重要なメンバーであり，彼女は1945年から1950年までノッティンガムのカールトン選挙区選出の議員であった。彼女は1976年，夫が亡くなる2カ月前に世を去った。このパトンの日記を入手したテイラー博士もウルヴァーハンプトンに住んでおり，それが入手のきっかけになった。

イギリス議員代表団訪日の背景

では次に，1947年秋のイギリス議員代表団5名の訪日の背景ならびに経過をみてみよう。

日本の敗戦とそれにつづく対日占領のなかで，アメリカ主導による政策が行われたことは周知のことであるが，イギリスの対日占領対策は英連邦のそれとして遂行されてきた。だが，第2次大戦中のアジアにおけるオーストラリア軍の軍事上の実績により，英連邦占領政策のなかではオーストラリアが主導権を握り，イギリスは後景に退かざるをえなかった。じじつ，戦後オーストラリア外交を指導したエヴァットは，日本降伏文書の署名にさいしアメリカ，ソ連とおなじく署名権を得たし，英連邦日本占領軍（BCOF）の司令官にはオーストラリア人ロバートソンが就いた。また，極東国際軍事裁判（東京裁判）の裁判長にはオーストラリア人のウェッブが就き，対日理事会の英連邦代表には同じくマクマホン・ボールが就いたのである。

対日理事会についていえば，最近訳出されたA.リックス編『日本占領の日々—マクマホン・ボール日記[6]』が明らかにしているように，ボーンの就任をめぐってはオーストラリア政府とイギリス政府のあいだで様々な対立があった。イギリス外務省はボールの英連邦代表任命に強く反発し，ベヴィン外相も失望を表明。イギリスのアトリー首相はオーストラリアのチフリー首相にたいしボールの指名の取消を求めたが，結局拒否された。こうして1946年4月にボールが就任するが，かれは，対日理事会の役割を弱体化し，すべての占領下の権力を自らに集中しようとするマッカーサーに絶えず不信感をいだいた[7]。ボールは自分の義務を，ボール自身のことばによれば，「1）英連邦が，占領政策につき他国と異なった独自の見解を表明する権利を維持するよう努力すること。2）この努力を行いつつ，米国と英連邦との間に深刻な亀裂があると受け取られるような言明や行為を避けるよう努めること[8]。」の2点に置いていたが，GHQの非軍事化や諸々の民主化政策に懐疑的であった。唯一の例外は，農地改革であり，これはボールの提案が実現したものとして知られている。

1947年7月末から8月にかけて1週間ほど来日したエヴァットが，その後急速にそれま

注（6） A.リックス編　竹前栄治，菊地努訳『日本占領の日々—マクマホン・ボール日記—』岩波書店　1992年（以下，『ボール日記』と略す）。このなかの「日記解題」，「注」，「訳者あとがき」が詳細で有益である。

（7） A.リックスによる「日記解題」，『ボール日記』p. xvi.

（8） 対日代表部マクマホン・ボールから首相シフリー宛て報告　1947年9月1日，『ボール日記』p. 249.

での政策を変えてマッカーサーの政策をほぼ全面的に支持するにおよんで，ボールはついに47年8月辞任，9月5日に日本を離れた。47年9月1日付でチフリー首相宛てに「親展・秘」の報告書を書いたが，そこにはいかにマッカーサーが対日理事会の設立に反対し，設立後も情報収集の妨害や対日理事会に勧告を求めないなど常にその機関を低い位置に置くようにしてきたかが詳細に報告されている。ボーンはこう書いている。「私は，SCAPは，常にソ連のことを口実として利用してきたと信じている。恐らく，マッカーサー元帥の態度を説明するより深い要因は，彼自身の気質と性格にある。いかなる場合でもマッカーサーは，どんなに些細な方法であっても，彼から注意をそらすことになるような機関が日本に作られることに強く抵抗したであろう，と私は思う。[9]」ボーンは日本の支配構造や日本人の思考様式には戦前と戦後のあいだに根本的変化がみられないとみなしていた。「もしSCAPの主張するように，占領政策が成功を収めたとするならば，講和条約締結後においては，単に穏やかな管理ですますことができよう。しかし，日本の現状が，SCAPの公式の評価と異なったものであるならば，日本の軍国主義の復活を避けるために，講和後においてもより注意深く持続的な管理が必要となろう。[10]」こう述べたボーンは，日本を同盟国とみるアメリカの政策を危険だとみていたのである。[11]

英連邦占領政策をめぐる以上のような1947年の事態をみるならば，なぜマッカーサーがイギリスの議員代表団を日本に招待したのかは，明らかだろう。英連邦代表のボーンとの対立が深まると（それは結局ボーンの帰国となったのであるが），マッカーサーは英連邦と再度緊密な連携をとり，自らの占領政策の実施状況を見聞させ，その政策に同意させること，これが必要だったのである。イギリス議員代表団もその訪日目的はよく心得ていた。来日直後の10月4日の記者会見の模様を報じた『タイムズ』は，つぎのように書いている。「日曜日に来日したイギリス議会代表団は，本日の記者会見で，最近まで対日理事会の英連邦代表であったマクマホン・ボールが，オーストラリアで，経済的，政治的，宗教的事柄についての日本人の思考は実質的には変わらないままである（remained virtually unchanged）と言明したことについてコメントするのを断った。[12]」注意すべきことは，『朝日新聞』『毎日新聞』など日本の新聞が，この記者会見のその他の応答は報道しているにもかかわらず，このボールの見解にたいするコメントは断ったということは報道していないという点である。マッカーサー批判に通じるボールの言明をめぐって何も書かれていない

注（9） 同上，p. 248.

（10） 同上，p. 262.

（11） 「ボールは，その著書 *Japan : Enemy or Ally,* 1948（邦訳『日本　敵か味方か』筑摩書房，1953年）の中で，日本の印象について述べている。この本では，拡張主義者日本の復活を阻止するために，太平洋地域の管理の必要性を主張しており，また対日理事会について大胆な分析がなされている。日本の社会構造や政治指導者たちの施政方針には何ら根本的変化が見られなかったので，日本を同盟国とみる米国の政策を彼は危険だと見なしていた。しかし，1964年8月キャンベラで開かれた会議に提出した論文の中でボールは，日本の行動を予測することができなかった点において，オーストラリアが当時採択した方針のほとんどは間違っていた，と主張した。」（『ボール日記』注241，pp. 303-4.）

（12） *The Times,* October 14, 1947.

のは，何らかの言論統制あるいは自主規制がなされた可能性が大きい。

議会代表団の記者会見
――日本の工業再建と民主化政策について

イギリス議会代表団は来日直後の10月13日と離日直前の11月4日に記者会見をしている。『朝日新聞』47年10月14日は“日本に進歩的な工業水準”との見出しをつけて，つぎのように報じている。

「来日したイギリス下院代表ゴードン・ラング師（労）ハーヴェー・ローズ（同）ジョン・ペイトン（同）W. ティーリング（保）W・スタンレー・プレスコット（同）の五氏は13日放送会館で内外記者団と会見し，左の要旨の一問一答を行った。

問　日本ではヤミ取引のために経済安定はかなり妨げられているが，英国ではどうか。

答　英国ではヤミ取引を発見次第厳罰に処することになっている。また国民自身もヤミ行為になじまぬ性質をもっており，国家経済の復興に個人として責任を痛感しているからだ。

問　英占領軍は日本から撤退するといわれているがどうか。

答　英国政府は約束に忠実である。最近の英軍司令官の撤退に関する声明はすでに承知のはずだ。[13]」

（米第8軍ではなく）SCAPマッカーサーに直属する英連邦軍[14]は，軍司令部を呉に置き，広島，岡山，鳥取，島根，山口の5県と四国の4県を占領していた。空軍は岩国，防府，美保に駐留した。広島にはオーストラリアの第34歩兵旅団が駐留し，東京には英連邦の一大隊に護衛と儀礼的目的のための宿泊施設が提供された。[15]

つづいてドレーパー声明についてつぎのような応答がなされた。

「問　ドレーパー米陸軍次官は日本を東洋の工場とすると声明しているが……

答　日本は従来も高度の工業国だったが，今後もそうだと思う。日本から工業力を奪うことは不可能だ。

問　日本の工業水準はどの程度にすべきと思うか。

答　それは対日講和条約の主要題目だから

注（13）『朝日新聞』1947年10月14日

（14）竹前栄治「訳者あとがき」，『ボール日記』p. 309. イギリス労働党は，「英連邦軍はいまやその数は減っているが，最高司令官の指示のもとで日本の占領で役割を果たしつづけている。」（*Labour Party Year Book*, 1947-48, p. 98）と書いている。

（15）R. N. L. Hopkins, 'History of the Australian Occupation in Japan, 1946-50,' in *Royal Australian Historical Society Journal and Proceedings*, vol. 150, 1954.（『ボール日記』注79, p. 286に引用されたもの）

（16）『朝日新聞』1947年10月14日

『毎日新聞』47年10月15日によれば，イギリス議会代表団はドレーパーの声明については，「日本の工業レヴェルを，それが東洋の他の近隣諸国を苦しませ，あるいは破壊する程の工業力としてはならない。」と答えたとされている。離日直前の記者会見では，「前の会見で日本はアジアの工場として残らねばならないといったように報ぜられたが，これはまちがいだ。日本が将来工業国家として再建出来ない程度に工業施設を奪われるものではないといったのである。」（『朝日新聞』47年11月5日）と発言しなおしている。

ここで論ずべきではないが，日本が自力で伝統を維持するに満足な進歩的な水準でなければならない。しかし安全保障の見地から，隣接諸国の回復を破壊せしめるほどの水準は許されない。

問　英国における炭鉱国営の結果はどうか。

答　これは大問題だから結果をいうのは早すぎる。もし保守党内閣になっても国営は変更しないだろう。[16]」

ドレーパーの声明とは，10月9日，占領地救済費削減のため日本とドイツにたいし工業製品の大量輸出を許すべきだとするものである。すなわち，ボストンで開かれた連邦準備銀行株主総会の演説で，大略つぎのように述べていた。「昨年度米国は占領費以外に旧敵国陣をキガから救うため7億5千万ドル以上を使った。つまり，日本，ドイツ，オーストリア，朝鮮の諸国民に食糧を供給するためアメリカ国民の一人一人が5ドルずつ負担したわけである。今後もひきつづいてこの金を支払いたくないならば，米国は日本にもドイツにも工業生産物の大量輸出を許可し，食糧その他原材料の支払にあてさすことが必要である。もちろんこれは新しい日独に軍事機構再建の基礎を与えようとするものでは絶対にない。[17]」

また，日本の繊維産業の復興については，「問　日本の繊維工業が復興した場合，英国と市場の点で競争とならないか。答　英国は日本の繊維工業を恐れていない。ただ日本の繊維工業従業員が英，米のそれと匹敵する生活水準を許されることを望むのみだ。[18]」とある。この点は『タイムズ』通信員が一般的に得た印象として，代表団として回答したプレスコット氏は「日本の繊維産業の再建にはひどく時間がかかると信じている。指摘しなければならないのだが，この見解は日本の会社はもっていないものである。[19]」と報道していることに注目したい。この点は11月4日の記者会見で，「紡績機械の質的なちがい，原料供給の条件などから日本の繊維工業は今後5年間英国のそれとは太刀打ちできないであろう。[20]」との推測がより明確に示された。

では，政治的改革，民主化政策についてはどのような印象をもったのだろうか。『朝日新聞』によれば，「問　片山首相は英国労働党を模範とするといっているが，英国労働党

注（17）『朝日新聞』1947年10月10日
（18）『朝日新聞』1947年10月14日
（19）*The Times*, October 14, 1947.
（20）『朝日新聞』1947年11月5日
（21）『朝日新聞』1947年10月14日
（22）『毎日新聞』1947年10月14日
その同じページの「余録」というコラムでは，「入京したイギリス下院代表の記者団に対する談片を読んで感じるのは，イギリス政治家の常識である。そして政党的感情の極めて洗練されていることである。例えばイギリスの国内問題を語っても，その人が労働党か保守党かの区別は，ちょっとつかない程である。……日本の紡績業が決してランカシャ紡績の脅威となることはないと断言したのは，保守党議員であり，日本の紡績工が米英の紡績工と同じ賃金，生活水準を与えられることを希望したのも同じ人であった。」とその印象を記している。回答したプレスコットは，注(1)で記したようにランカシャーの選挙区から選出された保守党議員で，とくに綿業の担当委員であったから，上記のように回答したのである。

は日本の政治をどうみているか。答　日本が真に民主主義的議会をつくることに関心をもっている。もしも議会が従来のように単に顧問的地位に止まるなら意味がない。[21]」とある。同じ応答が『毎日新聞』では，「日本の社会党をどう思うか。」という問いにたいしては，「われわれが最も関心をもっているのは，日本で行われているデモクラシーの実験だ。日本の政党(ママ)が成功するのは，真に民主的な政党と議会をつくることにある。そうすれば英国は好意の手をのばすだろう。[22]」と答えている。

この10月13日の記者会見で，代表団のなかで回答したのはもっぱらプレスコットだった。パトンにとっては退屈極まりないものだった。パトンの日記には「午後2時30分，われわれは放送会館で最初の記者会見をした。息苦しい暑い臭気のある部屋が汗ばんだジャーナリストたちで一杯になっており，ほとんどが日本人である。貧弱な質問が同じように貧弱な回答をひきだす。午後3時30分，ラングと私は抜け出し，日本人の通訳をつれて自転車で見物にでかけた。」とある。パトンは途中で抜け出し，3人で東京探索にでかけ，銀座，神田を経て吉原まで見学にいっている。

日本人移民問題

滞日中，最もセンセーションを引き起こしたのは，移民にかんする議員代表団の発言であった。「わが国の移民問題が日本視察に来朝した米英の人たちによってとりあげられた。英議員団の発言は『日本の過剰人口はブラジルへ500万その他蘭領ニューギニアなどにも送れる』という内容のものであったが，この一言はその翌日赤道を越えてオーストラリアに響き，チフリー首相やオランダの駐在情報官が『とんでもないことだ』と否定したということがメルボルン放送で即座にうちかえされてきた。／日本人が南十字星輝く赤道近くの世界にのり出すことが，それほど鋭い反響をよんだわけである。これについて4日当の英議員団はさらに『日本の移民問題は講和会議で決定すべきことで，広大な地域へ日本の過剰人口を吸収することが将来可能性があるといったのだ』と説明した。[23]」

同時に『シカゴ・トリビューン』社主マコーミックも，同日片山首相と閣僚に会ってこれと同様な意見を述べた。この紙面では，イタリアが47年2月に講和条約に調印し，批准の9月までに50万近い移民を送りだすのに成功したことが記され，「このことは同じ無条件降伏を受諾した国の，講和以後に歩いてきた足取りとしてみるとき，日本にとっては非常な関心を払うべき事実でなければならない。[24]」と指摘している。イタリアは講和後直ちに各国と移民協定を結び，アルゼンチンには4月から農業移民が毎月3万人ずつ，フランスには鉱山労働者が3月以来25万人を送り出し，いずれも旅費は向こう持ち，入国後はその国の労働者と差別待遇をしないとの2原則をつけたことも書かれている。

25日間にわたり日本を視察した一行は，離日前につぎのように語った。「ブラジル，シャム，ニューギニアなどへの移民についての発言が問題となったが，本当の意味はこうだ。広大な地域をもつこれらの国々は日本の過剰人口を吸収する余力があり，この点から日本人の移民も将来可能性があるといったのだ。

注（23）『朝日新聞』1947年11月9日
（24）同上
（25）『朝日新聞』1947年11月5日

移民問題は講和会議で決定すべきだ。[25]」

帰国後イギリス議会での発言

ティーリングはイギリスにもどると，翌年48年1月23日の議会で，イギリス政府が日本に，極東に無関心であることを指摘し，「われわれは極東に関する政策を全く持っていないといわざるをえない。日本の状況と極東の状況はイギリスの観点から満足するには程遠い。アメリカ人は多くの点でわれわれの態度や行動にかんして全く満足していない。」と述べている。そして，「マッカーサーが招待したのは，イギリス人が日本でなされていることをもう少し知るべきであるから」であったと訪日招待の目的を語り，「日本人はイギリスについて無知」であり，イギリスは「将来競争者になる日本にたいする政策」をもっていないと警告を発している。[26]

つづいて立ったパトンは，日本で，新しい選挙制度，憲法制定，農地改革，教育改革が実施されているが，これらの法制化は，「あの国で完全な政治革命をなし，この東洋の国に始めて効果的で健全な民主主義制度をもたらしている。[27]」と述べ，他の議員が発言を遮ろうとするなかでつぎのようにつづけた。「この［民主主義の装置の］発展はマッカーサー元帥とアメリカ占領軍の希望によりもたらされたといわれているし，それは本当だ。だがしかし，その見解はこれらの法制化が民衆的に選挙された政府（polularly elected Government）によって実現したという事実を忘れている。日本政府の指導者たちが彼らがつくった政治機構を信じていないと示唆することは，彼らにたいして不公正であろう。そして社会主義者片山首相の指導下にある現在の連立政府は，民主主義の原則を心底から信じて，断固としてその実現のために働いている政府ではないと示唆することは，おおきな不公正であろう。／アメリカの影響が強かったことにはわれわれは同意するけれども，私の熟考した末の見解は，これらの法制とこの新しい制度が日本政府と民衆的に選出された現在の政府の意志と支持によってもたらされたものであるということである。[28]」

パトンはさらに経済の改革について述べ，「評価は政治的側面の評価よりもより好ましくないものである。政治的側面では明快な決定，明確な目的，成功裏に実現した政策があるが，経済的側面を熟視すると，全てが曖昧で不明瞭で未決定である。[29]」と経済的改革の不徹底さを指摘した。そして，議会はドイツの経済復興に寄せるのと同じような関心を日本にも向けるべきだと主張した。発言の最後にパトンはつぎのようにのべて13分間の演説を終えている。「私はひとつのことを確信をもって本議会にいうことができる。それは，完全で相当な生活を人々に保証するだけの十分な日本の経済が同時になければ，日本に安定した平和はありえないし，新しい政治的民主主義制度を永続的にすることもできない，ということである。[30]」

3人の議員を派遣した労働党は，訪日議会代表団の成果を，「占領のあらゆる側面にそ

注（26） House of Commons, Foreign Affairs, January 23, 1948, *Hansard* vol. 445, 570-75.
（27）（28）（29） *Ibid.*, p. 578.
（30） *Ibid.*, p. 579.
（31） *Labour Party Year Book* 1947-48, p.98.

の代表団が示した鋭い関心は，この国［イギリス］と最高司令官［マッカーサー］とのあいだの良好な関係をいっそう強めたし，また日本人に好印象をあたえた。[31]」と評価している。パトンの滞在中に書かれたこの日記では，このような議会や党での代表団の公式表明とは反対に，マッカーサーの人物批判からアメリカによる占領政府批判までいわば本音が随所に記されている。

日　　記

10月11日

早朝の暗闇のなかを総督のランチで我々の出発地へと向う。いまは日本への旅の最終行程を英国空軍に託す。英国海外航空会社B.O.A.C.の快適な配慮はすべて終った。我々がいまや軍の管理下にあるのは，痛ましくも明白なこと。彼等は我々を快適にするために最大限尽力してくれたけれども，手筈は極めて原始的である。飛行機は旅客用に改造された古いサンダーランド飛行艇だった。潜水艦に入っていくようだった。窓は立ち上ってようやく見通せるほどである。露出した金属柱やボルトが見えたり，時にはそれに触れたりすると，巨大なメカーノのセットという印象を与える！すべてがガタガタと鳴るようだった。飛行艇が離水するために水上を突進したときの音と振動は，ほとんど耐えがたいものだった。飛行中はそれは弱くはなったが，会話を交すのは不可能だった。我々は午前7時10分に飛び立つと，岩国まで9時間飛行だと告げられた。岩国に降りて，東京に向かう前夜を過すことになっていた。我々は離着水のさい，救命チョッキを着用するよう命じられた。午前9時，快晴のなかを我々は中国の海岸の上空や海岸近くを極めて安定した飛行をしてきて，いまや福州地区のどこかを飛んでいるのだが，福州は遠く離れていて見えない。私が中国本土を最初にはっきりと近くに見たのは，別のすばらしい瞬間だった。諸都市がイングランドで通常見られるよりいっそう隣接した集団をなしているようであり，不規則に広がってはいないことに私は気づいた。おそらくその都市は城壁都市であるか，あるいはかつてそうであったのだろうが，この距離ではわからない。この高度から見ると，緑の草木があるという形跡はほとんどない。大地は珍らしい荒地の外観を呈しており，色は赤褐色である。全くの丘陵地帯で，遠く背景には高い山々が連なって見える。その色とはっきり見える荒地は，我々の高度のせいかもしれない。汕頭（スワトウ）を通過したとき見たその光景は，私に海賊の歴史を読んだことがあるという記憶をよびおこさせた。我々は最初の食事をとった。午前9時45分。私は大いなる歓待を受けたところである。操縦室に昇らせてもらい，レーダー設備をはじめとする全ての機械を見せてもらった。将校たちはひどく気むづかしく堅苦しいが，皆極めて若く，我々のような彼等に見慣れないタイプの人々に対しては，たぶんとても恥ずかしがり屋なのだろう。午後1時。日本列島の最南端を横切ったばかりであり，それまで防寒用にくるまっていた毛布を脱ぎ捨てると，今ははじめて気分がよくなった。東シナ海上空の長時間におよぶ飛行中には，厚い白い雲のはるか上空を飛んでいたので（私は多少耳なりがしていた），とても寒かったのである。それは最も不快な行程であったが，いまや完全な飛行日和となり，順調に事が運んだ。午後3時。予定より1時間早く岩国港に着水することになった。輝く太陽と明るい青い海。海岸線を横切ってからは，我々の眼は眼下のすばらしいパノラマにピタ

リと収まっている港に吸いつけられていた。幸いにも雲はなくなっており，輝く光の下で細部を全て見ることができた。この国は私が想像していたよりも山が多い。段々畑の開墾の拡がりが印象的である。丘陵の急斜面のひどく高いところでも，肥沃な土地ならどんな狭い窪地も開墾されている。その労働は莫大なものにちがいない。海岸線は輝光のなかで曲線を描いており，深く入り組んだ入江はしばしば白砂でふちどられたり，砕けた白い大波に切り込まれたりしていた。見えるのは島また島であり，魅力的で美しい山々が高く重なって，それはひとつづきのすばらしい大地のように見える。午後3時10分。ちょうど予定より1時間早く，スムーズに完璧な着水をした。再び新鮮な大気のなかにいるのは，さわやかで暖かく，かつ快適だった。飛行機は金属製の納骨堂であったが，太陽はすぐに私の身体のひどい寒さを取り去ってくれた。我々は空軍少将が勤務で不在のため，司令官代理ランキン准将に会わされた。（私はいまにも「ああ，有難い」といいそうだった。）我々は空軍少将の家へ案内されたが，その家は彼がその晩，我々の自由な使用にと提供したものだった。それはすてきな日本風の家だが，洋風の家具は極めて品位のあるもろさのなかでは重厚すぎ，かつ頑丈すぎるようにみえる。入るときに玄関で靴を脱がなければならなかった。本物の日本製マットがこれまでどおり床の上に敷いてあり，広々とした美しく磨かれた板がある。その家の醸しだす全体の効果は，品位，美，平安，静寂である。ローズと私は夕食前にたいへん長い散歩をした。多くの弓型だが平らな橋梁のある錦帯橋を渡った。木造の橋でこのタイプの建造物を見たのはこれが初めてだったが，これは典型的に日本的なものとのことである。我々はその川の堤に沿って数マイル，フゼカワ村まで歩いた。

玉石が敷きつめられた川底が露呈し，樹木でおおわれた丘の間をくねっているその川は，雨の降らない夏の北部スコットランドではほとんどどこででも見かけるものである。水中に立っている多数の漁師がおり，数十人が餌をつけない半ダースの釣針で川底をトロールしているようだった。その目的は食料であって，スポーツではない。彼等は小さい稚魚を全く自由自在にとっていたが，何故網を使わないのだろうか？　イギリスの漁夫ならば，あれ程多数が接近して並ぶと卒倒してしまうだろう。家に戻り，准将招待によるすてきな夕食に行く。食事は3人の日本の少女が給仕したが，じつに見事な着物が彼女たちをさらに美しくしていた。

彼女たちの衣裳は公式行事用のもので，完全な民族衣裳であるが，購入不能なまさしく先祖伝来の家宝であり，貨幣価値にすると100ポンドは優に越えると聞かされた。その衣裳の絶妙さからして，私はそのことを容易に信じることができた。その少女たちは優雅で上品で礼儀正しく，少しも媚ることなく，よく躾られているようにみえた。「サンキュー」とか「プリーズ」とかを口にする我々イギリスの習慣は理解されないだろうし，彼女たちを当惑させるだけだろうから，彼女たちの行為の全てに注意を全然払わないように我々はあらかじめ求められていた。（私はそれに従った。だが，親しい微笑を送ることには躊躇しなかったが，それは誤解されてはいないと私は確信する！）准将はあとで我々に，彼女たちは生れがよく，よい教育を受け，両親はよい社会的地位の人達だといった。彼女たちは空軍少将とそのお客さんたちのためにこの接待を自発的にしているのであって，この種の同様の接待の申し出は（日本の）重要人

物にたいしてもしばしばなされるとのことである。我々の軍隊は「非親交」命令に周到に従っていると准将からきいて驚いたが，性病にかかる率が異常に低いという事実は，かれの言明が正しいことを裏書きしている。いま疲労困憊し，快適この上もない西欧のベッドで早目に就寝。

10月12日

午前6時15分，呼び起こされる。（昨夜と）同じ3人の少女が給仕するすばらしいイギリス風朝食。今朝は日常の着物（これもたいへん美しい）と帯をつけている。家を辞するとき美しい少女が膝をついて私に靴をはかせ，紐を結んでくれたのは新しい経験だった。謝意を表することなしにこのようなサーヴィスを受けることや，サーヴィスを受けること自体が私には少々厭なことだった。だが，彼女たちは私の礼儀作法を理解しないだろうとのことだったので，致しかたない。午前8時15分に飛行場，今回は大地の上である。あのサンダーランド飛行艇にいまや別れを告げ，東京へは［H.R.H.］ロバートソン中将の個人専用機で向うからである。ああ，有難い！8時35分に搭乗，465マイル離れた東京へ向う。平穏な旅であり，東京の羽田空港に午前11時20分に着陸した。ふわふわした白雲が大量にあったけれど，幸いなことに，雲の囲みから突出した，まるで浮いているような壮観な富士山を見ることができた。太陽の光のもとで輝く雪の白い円錐形は，まさしくしばしば絵に描かれたそれであった。大がかりな歓迎委員会があり，我々を待つ多数の写真班がいた。あたかも連合国軍のあらゆる部署のあらゆる高官たちが（マッカーサーを除いて！）大使と共にそこにいるようだった。我々は明らかに極めて重要な人物だった！車は列をなして，我々が泊ることになっていた大使館に向い，そこでガスコイン夫人［イギリス代表部首席のアルバリ・ガスコイン卿の夫人］からたいへん厚いもてなしをうけ，たいへん快適に泊ることができた。大使館は中央に大きな建物があり，その周囲をあらゆる種類の公用および私用の建物が囲んでいる，美しい庭付きの白人屋敷である。全体は頑丈な城壁をめぐらした村落に似ており，ここでは武装した兵士たちが護衛についていない点が異なるだけである。午後1時30分，我々は再び大型車に乗ってそこを離れ，マッカーサー元帥と昼食をとることになっているアメリカ大使館へと向う。その建物には壮麗な部屋があり，印象的な美しい置物がたくさんあった。これはあらゆる種類の上流階級の人々のもうひとつの集りだった。我々は将官の案内で広々とした応接間の入口前の大きな半円形のなかに入った。その部屋でマッカーサー夫人が我々を迎えたが，彼女は50歳位にみえ，かなり高音のかぼそい声で（ひどく感嘆の声を発しながら）子供のようによく喋ったが，ひじょうに愛想のよい人である。元帥は狂信的禁酒主義者なので，我々は果汁を飲みながらその大人物の登場を待った。彼が入ってきたとき，それは「登場」というべきものだった。彼は部屋にまたいで（というのがピッタリの言葉である）入り，夫人に「ダァーアリン」といい，大きな音をたててキスをしたが，彼女はしばらくの間，はた目にもわかるほど「そわそわ」したぐらいである。それは見事な演技だった。ここにいる，重要人物の全てがいかに彼をうやうやしく扱っているかを見るのは興味あることだった。マッカーサーは6フィート位の身長で，痩せていて筋骨逞しく，青白い顔で光沢ある真黒な髪をしている。彼にはインディアンの血が流れているという話がい

かにして広まったのかは容易に理解できる。彼は70歳の人間（と私はきいているのだが）に全く相応の容姿をしている。彼は声量のある低い声で，ぶっきらぼうで率直な「アメリカ式」スタイルのあいさつをする。彼の握手は強かった。彼にはひととあいさつするときそのひとの眼をじっと見つめる奇妙な癖がある。これはたぶん元来は「秘密の新案」だったのだろうが，いまや固定した習慣になっている。我々は昼食に簡単な食事をだされたが，アルコールはなかった。私の右側には，日本担当アメリカ海軍参謀長のグリフィン海軍中将がマッカーサーから一人おいて座っており，私の左側には王室弁護士コミンズ・カー［極東軍事裁判のイギリス参与検事］が座っていた。ローズはグリフィンとマッカーサーの間に座った。私は元帥がたいへん親切な興味深い人物であることに気づいた。王室弁護人カーは，ここで日本の戦犯裁判にたずさわっている。私はマッカーサーをかなり近くで観察することができた。彼は常に彼自身を劇的に表現するような非凡な人物である。

彼の「疲れたタイタン」のポーズは，「運命を担う人」という他のポーズに変わる。会話のなかの特殊な事柄にあわせて，両者が交互にでたりひっこんだりする。彼は明らかに威圧的かつ活動的な人である。ティーリングは彼の反対側に座っていたのだが，のちになっていうには，マッカーサーは明らかに狂人かさもなくば天才であるが，そのどちらであるかはわからないとのことだった。彼が偉大な演技者であることは確かである。私はマッカーサーは常に会話を独占するから気をつけよといわれてきたが，彼はハーヴェイ・ローズという好敵手に出会った。ローズがこの世でもっとも興味をもっているのは繊維で，これについてはたいへんな専門家である。彼はマッカーサーもまたその産業の重要性を完全に了解すべきだと決めてかかっていた。マッカーサーがわずかな間よどみなく話をしたと思ったら，ローズが日本の繊維に関する質問をして，その話を遮ぎるのが聞こえた。それから彼は，マッカーサーに解答する機会を与えずに，強いヨークシャー訛りのしわがれ声で，「羊毛」についての際限ない独演をやりはじめた。マッカーサーは幾度かそれを遮ぎろうとしたが，ローズは耳を貸さず，単調な話をつづけた。マッカーサーは断念せざるをえなくなり，何も発言することができずに食事が終る前には羊毛と木綿にぐるぐる巻きにされ繭のようになっていた。その後，お茶の時間に大使館に戻る。我々の計画は全く過密であることを発見し，そのことについて長い議論をしたが全く不成功だった。午後8時，我々は「私的な非公式な」夕食会をもったが，そこには多数の招待客がいたようにみえた。私の隣りにはガスコイン夫人が反対側の隣りにはダーク夫人がおり，楽しいお喋りをした。その後，ブリガディー・ファーガソンと話をしたが，彼はマラヤでの日本の侵略軍からの脱出についておもしろい話をした。のちに閣下（彼を以後「H.E」と略称しよう）と［チャールズ］ガードナー中将［極東英国首相特別代理（1945年-48年），イギリス代表部首席（1945年-46年）］（彼はマッカーサー王の王宮におけるアトリーの私的代表である）と国内事情について長い興味深い話をした。閣下は政府のインドからの撤退政策を擁護したが，ガードナーはたいへん批判的だった。ガードナーは私が会ったなかで最高の人物の一人であるようだ。彼は騎兵である。その後，じつに心地よく眠る。幸いにも，私は加藤さんという個人の近侍を得た。年老いた日本人で大使館に全生涯を捧げてきた人で，たいへん面倒見

のよい人である。しかし，彼が洗濯やアイロンかけのために，脱いだすべてのものを持っていくので私は当惑した。ズボンとコートは私が脱ぐといつでも海綿でぬぐわれ，アイロンをかけられる。今日の午後着換えをしたとき，私のはどこへいってしまったのかと思った。私は盛装しなければならないのだ！彼はネクタイや洗いたてのハンカチを靴下等と一緒にベッドの上に並べているのだが，私の細長いえり飾りを広げるのに手を焼くことだろう。

10月13日

昨夜は充分休まった。午前7時30分，加藤さんがお茶をもってきてくれ，風呂の用意ができたと告げた。朝食後10時に，連合国軍最高司令部（アメリカ軍司令部）に我々全員が簡単な報告にでかけた。各部署の責任者たちは，優れた直接的な事実に即した陳述をしたが，最も印象的な話は情報部長ウィロビー〔GHQ参謀第二部（G2)〕のしたもので，それは部外秘として扱われねばならないものである。その話は司令部の強さ等にかんするかれの評価を含んでいた。（私はあとでウィロビーは生れは生粋のドイツ人だが，アメリカ人に帰化したときいた。彼はそのような話しかたをする。彼はマッカーサーの大のお気に入りである。）我々は大使館で他の気持ちよい仲間と昼食をとる。（食事は常にイギリス風であり万全の準備が整っているようにみえる。ワインはすばらしい。）午後2時30分，我々は放送会館で最初の記者会見をした。息苦しい暑い臭気のある部屋が，汗ばんだジャーナリストたちで一杯になっており，ほとんどが日本人である。貧弱な質問が同じように貧弱な解答をひきだす。午後3時30分，ラングと私は脱けだし，日本人の通訳を連れて車で見物にでかけた。銀座を過ぎて，商店街・歓楽街に行く。二つの劇場を覗くが，両方とも真昼間なのに超満員である！　そしてこれが戦争で破壊された国でなのである。一方の劇場ではキャバレー・ショウをやっており，他方ではけれん味のない演芸をやっていた。両方とも音楽入りの西洋風のものである。私は両方とも貧弱な娯楽だと思ったが，演芸のなかの二人の少女歌手はすばらしい声をしていた。我々はつぎに大学の校舎がある学生街（神田）をみた。校舎はひどく破壊されていたが，それでも印象的だった。それから通訳が我々は吉原（「赤線」地帯）の近くにいるといったので，私はそこを車で通りぬけられるかどうかきいた。彼は運転手（アメリカ人兵士）に指示し，我々は高い鉄の門を通過した。ラングは牧師なので，私がここはいかなる地区かを説明するとひどく身震いした。そのアメリカ人運転手も同様であり，後に私にいうには，そこは厳格な「立入禁止地域」であり，そこを車で通り抜けると処罰されかねないとのことだった。昔の吉原は多くは残っていなかった。数軒古い家がいまでも建っているだけである。ほとんどの家は新しい木造家屋で，そこで数人の女性が昔ながらの商売を営んでいるだけである。そのうち何人かは美しい着物を着ており，たいへん魅力的にみえた。米兵の運転手の目の玉は飛び出さんばかりであり，確実に彼は友人たちにこのことを得意気に話すだろう。彼はそこに立ち入ったおそらく最初の米兵だろう。お茶のため大使館に戻る。そこで〔ハーバート・ヴェーレ〕レッドマン〔英国大使館情報担当参事官，1946年－61年，当初，議会代表団の同行者〕がいまや危機を脱し回復途上にあるとの朗報をきいた。彼は香港で入院中である。午後8時，白人屋敷の一つで，夕食（再び英国風の）をダーク空軍中

佐とその夫人，フィギス大佐や他の客人たちととる。よい友人たちとたくさん楽しい話をした。

10月14日

午前9時30分，会議のため連合国軍最高司令部へ。ウィティング元帥が迎えたが，彼はアメリカによる民政のさまざまな活動にかんする短いが興味深い概略を述べた。その後，我々統治部の専門家たちと会談するために座った。これは占領の民生的側面である。長いテーブルの両側に座ったが，その専門家の説明は全く自由な質疑応答によってたびたび中断された。しかつめらしさは，時々，かなりのからかいや冗談によって消えた。アメリカチームは一流の人々のようであるが，我々自身のグループは本当に見ばえがした。アメリカ人は皆若く，たぶん35から50歳だったろう。彼等は我々に自分たちは日本をどうしようとしているのかを話した。――すなわち，日本を近代民主主義に変形すること，封建的な国家と経済制度を破壊すること，古風な制度と思考様式を根絶すること，そして，一般的にいえば，国民を含めて一切合財をアメリカ式モデルに従って変形することである！　彼等の何人かはそのことに疑問をもっているかもしれないが，そのような徴候はみせなかった。私にはそれは不可能な計画のように思われる。というのは，私には彼等が日本における伝統の力を完全に過小評価していることは確かだからである。だが，彼等の熱狂ぶりには目をみはるものがある。12時15分，我々は参議院（日本における上院）の議長公邸にいき，そこで，その議長と衆議院（日本における庶民院）議長が我々を昼食に招待した。衆議院議長はかつて機械技術者だったが，いまは労働組合総同盟会長である。（〔日本〕政府は社会主義である。）通訳を介して彼と話をする。彼の名はK〔駒吉〕・松岡である。参議院議長はT〔恒雄〕・松平といい，ロンドンの大使館での長い経験をもち，上手な英語を話す。我々はすばらしい日本食をとったが，私はとてもそれが気に入り，少々酒も飲んだ。ラングは返礼の美事な短いスピーチをした。午後2時30分，連合国軍最高司令部に次の会議のために戻る。国の資源や人々の状態にかんする多くの価値ある情報を得た。真に有益かつ貴重な一日だった。午後4時30分，ティーのため大使館に戻り，滞日中のイギリス人実業家たちと会う。合衆国当局の手による彼等の処遇には腹がすえかねるようで，不満が数多くだされた。我々は最善を尽して助力することを約束した。午後8時，大使館で公式夕食会。すばらしい夕食と極上のワイン。高官とその夫人たちとたいへん快いつきあいをする。グリフィンに再会して嬉しかった。私は彼をいっそう好ましく思うようになった。私が話をした人のなかにはパトリック卿（彼が何をしているかは神のみぞ知る！）やシアラーと呼ばれるたいへんそっけないはにかみ屋がいた。〔ジョン〕ノースコット〔オーストラリア参謀総長（1942年－45年），日本占領英連邦軍総司令官（1945年－46年），オーストラリア・ニュー・サウス・ウェールズ州総督（1946年－1957年）〕判事やウィリアム・ウェッブ卿〔極東国際軍事法廷裁判長，（1946年－48年）〕もいたが，両人は戦犯裁判のためにオーストラリアからここにきている。ライダー夫人は禅宗の熱心な信奉者であり，かつ解説者であることがわかったが，彼女の熱心さはそれを解説する能力をはるかに越えており，私には依然としてその秘密がわからない。シーボルト夫人は父をフランス人，母を日本人とする魅力的な婦人で，日本に生れ，合衆国事務官の

シーボルド〔対日理事会議長，(1947年8月)〕と結婚している。シーボルト夫人は美しく，極めて上品で完璧な英語を話し，もちろん日本のすべてのことについて豊富な知識をもっていた。彼女と話していて，私はついにここにいる見知らぬ人々について確実な情報を得はじめたと思ったが，こういう時はいつでもそうなのだが，我々の会話は極めて短かかった。私はひじょうに疲れているので，これを書き上げるのに無理矢理立ち向っているのだが，もしいったん止めたらこの習慣はこわれるだろうと確信しているので，無理にでも書いたのである。とうとう午前1時45分，床につく。

10月15日

午前9時，連合国軍最高司令部の治安警察，監獄等々にかんする会議。午前11時，国会にて，参議院議長の出迎えを受ける。傍聴席から議場を見る。議長が我々の名前を呼ぶので，起立し礼をするよう指示される。我々がそのようにすると拍手喝采。これは座席が馬蹄形になっている美しいホールである。その後，我々は議長および多数の参議院議員たちと円卓討論をした。重要なことは何もでてこなかった。通訳を通すことが自由な意見交換の障害となっている。かれらは皆，明らかに自分自身に自信がなく，質問にたいする答えもたいへん「用心深い」。アメリカ人に受け入れられるような好都合なことをしきりにいおうとしたがる。午後1時，我々は首相と閣僚たちに招待され昼食をとる。たいへんよい昼食で，日本の協同組合について国務大臣と有益な話を交わす。かれが私に話したことによると，協同組合は余り重要でない。その後，我々は衆議院の議会に参加すると，同じ歓迎方式がとられた。馬蹄型の座席のあるもうひとつの豪華な議場。座席の配置が全体に広々しているのが印象的だった。もう一度円卓会議が議員のなかの議員とでもよぶべき人々と行われる。私は幸運にも社会民主主義者で熱心なフェミニストで強い産児制限論者の加藤〔シズエ〕女史と話すことができた。ヨーロッパを広く旅行したことのある人で完璧な英語を話す魅力的な婦人。そのあと私は片山首相と短い話をした。彼は英語が駄目で，かなり鈍く印象的でない人物であるようにみえたが，これは通訳を必要としていたからかもしれない。午後5時30分，シーボルトの家でカクテルパーティー。同じうんざりする多数の人々。私の知るかぎりこのようなパーティーは時間を浪費する最も退屈な方法である。部屋の隅で幸運にもシーボルト夫人をみつけ，10分間ほど彼女と静かに話をする。彼女は当然熱心に彼女の国〔日本〕と国民について話をする。彼女は国と国民の双方についてきわめて多くの空想的無意味なことが語られているといい，理解の第一歩は古い奇妙な伝統や慣習についての全てを忘れることであり，日本人を他のすべての国民と同じような，同じ精神や心をもった男や女と考えることであるという。自明のことであり，全く正当だ。午後8時，大使館で静かな夕食。数時間の大勢の人との外交的儀礼のあとの何という休息。11時前にベッドに入る。たいへん疲れる。

10月16日

午前9時，再度要点の説明のために連合国軍最高司令部へ。アメリカ人はこの種のことに凝るのだが，その一人が今朝私に，我々代表団の仕事の能力にかれらは強く印象づけられたといった。かれらは皆，我々がこの国や国民について，その過去や現在について何も知らないという前提で事を進めている。たぶ

ん必要なのだろうが，私には腹立たしい。かれらはどのように日本をかれら自身の鋳型に改造するかという仰々しい考えで一杯である。かれらはひどく自信（無知な軽率さとさえいいうる！）をもっており，かれらの政策の正当性やその実行性について疑問をもつ人には私は出会ったことがないのである。日本人の態度がこの根づよいごう慢さを助長している。日本人は卑下し，ひじょうにこびへつらっており，自分自身の精神や意志をもっていないかのようにみえるが，私は確かにこれは表向きの顔であると思う。我々はライダー大佐と有名な帝国ホテル（ロイド・ライトの製作）で昼食をとる。外観は大急ぎで見たのでこぶだらけという印象をもったにすぎないが，内部は火山岩で造られた全く不思議な――一種のハリウッド式――アラビア風なのに私は驚いた。廊下は不快なまでに暗く，部屋は栄光ある死体公示場のようだった。だが，もちろんライトの偉大な功績は，地震の衝撃にたいしてその建物が完全に強固だったことを実証したことにある。午後さらに情報を得るために，連合国軍最高司令部に再び戻る。その後，西側の実業家のために収集された日本製品の展示場を訪れた。かれらはいまや再び日本に浸透しはじめつつある。多数かつ多種類の見本があるが，そのほとんど全ては未だ製造されていないか，販売までに長期の遅れを余儀なくされるものである。それから東京ホテルを見にいったが，そこは外国の私的貿易商たちがやむなく住んでいるところである。サーヴィスはよいが，一日2ポンド10シリングという費用にかれらは不平をいっている。午後5時，フィギス大佐の部署にマーガレット・アレン女史を訪問。アレン女史は若くて美しい知的なアメリカ婦人であり，連合国軍最高司令部で不特定の仕事をしている。彼女は日本で生活し仕事をしている朝鮮社会民主主義者たちの歴史について，多少私に話した。かれらは，天皇の暗殺を試み終身刑に服している朴ユオに指導されている。彼女は朝鮮人と朝鮮に好感をもっているようである。彼女はまた日本の原住民アイヌの子孫はなお北海道に生活していることに触れた。かれらは熊の崇拝者である。午後8時，〔フレイン〕ベイカー准将〔GHQ 渉外局長〕との夕食へ。彼は厳格な人のようにみえたが，私にはたいへん楽しい夜だった。私は幸運にもマッカーサーの医師である軍医大佐と長いこと話をした。かれはマッカーサーの習慣と状態について話をしている間，全く抑制されていなかった。（彼はたくさんカクテルを飲んでいた。）マッカーサーはほとんど動かしがたい養生法をもっていると彼はいう。毎日昼食後2時間眠り，夜は8時間眠ることを主張する。彼の禁酒主義は狂信によるのではなく，彼の健康状態を心配することによっている。彼は特別のばあいに乾杯の音頭をとることはあっても，ワインを飲むことは殆んどない。彼には，ベイカー准将とその職員が世界のニュースのダイジェストを毎日準備するが，彼は非常に視覚的な記憶をするので，彼は並はずれた知識をもっているとかれを訪問する者に印象づけることができる。彼は正統派キリスト教〔第1次大戦後アメリカ新教内で起った思想運動で聖書の字句を文字通り信じる派〕を深く信仰している。彼は周囲の将校たちに強い影響力をもち，彼の身体のフィトネス礼賛もかれらに影響を与えていた。しかし，その医師がいうには，マッカーサーは何も規則正しい正式の運動はしていないが，明らかに彼の部屋をゆっくり歩き廻ることで彼が必要とするものは全て得られている。その医者は日露戦争のときのマッカーサーの逸話を話した。（その当

時，マッカーサーは合衆国の軍事監視員だった。）彼は日本兵のために大量の特殊な刺激性錠剤を入手する役目だったが，日本兵たちはそれを手にするとただちに投げ捨てた。最後には，兵は飲みこむべしという天皇の命令がだされると，兵全員が絶対服従した。私には大佐の話のある部分には若干敵意があるように思えたし，彼は内心マッカーサーを嫌っているのだと思う。深夜家に戻り，ティーリングとプレスコットと「困難」がはっきりしているハーヴェイ・ローズについて話し合う。私はそれは針小棒大であると思った。ローズと胸襟をひらいて話し合うのは困難な事柄であるが，最終的にはプレスコットが引き受けてくれた。彼に幸あれ！

10月17日

午前9時，再度，簡単な報告のために連合国軍最高司令部へ。全くうんざりしてきているが，礼儀正しくするためには我々は何もいってはならない。今回は物価と配給についてであった。情報は不思議なほど不正確で，時々くいちがっているようにみえた。疑いもなく，大規模な腐敗と広範な「暴力行為」があり，アメリカ人はそれらを抑えようとしている。12時30分に，ニュージーランド人の〔T.W〕オブライエン准将〔GHQ経済科学局〕とかれの美しく，かなりおもしろい家で昼食。その家は日本の古い農家を模倣して建てられているが，全ての「近代設備」がある。（大した農家だ！）オブライエンは，どのようにしても冬はひどく寒く，近代的な暖房設備をしても同様であると不平をいった。彼は，おいしい食事とワインをごちそうし，楽しい交りになった。日本の「科学」について討論するために連合国軍最高司令部に戻る。ここでの他の全てのことがそうなのだが，それは古いものと近代的なものとのごたまぜであり，最も近代的な思想と技術と根強い迷信とが——時々，同一人物のなかで——共存している。教育水準は全体的に極めて低いといわれている。我々はつぎに労使関係課を訪問した。これは，人員も少なくその課が何をしようとしているのかについてひどく混乱しているという印象を私が受けた組織だった。（我々はよく選択されていない情報を多すぎるほど与えられるので，吸収する時間がない。とくに困ったことは確実な手がかりをみつけるためには，時間がないということである。）午後5時30分，我々皆ふらふらになって大使館に行くが，お茶と休息は有難い。午後8時，カナダ公使館へ食事にいくが，そこでシービー，アーモンド准将，W・ウェッブ卿，およびカナダ通商委員とよく話をした。大使館に戻り，待ちどおしかったベッドに入ったのは午後11時30分。

10月18日

午前9時，連合国軍最高司令部，天然資源局にて。極めて興味深い，有益な午前だった。ここのアメリカ人たちは万事心得ており，重要なことと瑣末なことの違いを知っている。これはたぶん彼等が理論ではなくて，厳しい現実を扱っているからだろう。主な討論は，日本の農業と漁業にかんしてであった。全捕獲魚類の64％が，わずか約1500メートル幅という沿岸の極めて狭い帯のなかでの内陸漁業の成果であると知って，私は唖然とした。大使館で昼食。午後2時，日本漁業にかんする専門家ネヴィルとイェオとさらに討議するために戻る。午後4時，アームストロング氏という人が私を迎えにきて，一人，モナミ・クラブに連れていかれ，そこで日本人のフェビアン主義者の人たちと数人の同じような考えをもつアメリカ人の友人たちに会ったが，三

人のたいへん好感のもてる婦人がいることがわかった。幣原男爵，ニゲシ博士，高良とみ子女史（国会議員）は，私とたいへんよい会話を交した。私は松本（現在，外務事務次官）と中村博士（国会議員）とも話をした。それからたいへんすばらしい興味ある日本の食事をとった。（そのクラブは日本式家屋にあるが，じゅうたんが敷いてあるので，靴を玄関で脱ぐ。）夕食は日本流であったが，ある譲歩が私とアメリカ人になされた。それは我々は脚を前に投げだして床から18インチほどの高さの低いテーブルの下に入れることを許されたということである。それでも，その姿勢は間もなくひどく不快になるものであり，全くそわそわして落ちつかなくなった。私は日本酒を飲んだ。はじめてだと思う。ひじょうに弱いアルコールであり，むしろ悪いシェリー酒のようだった。私は順番に一人一人日本人男性に「乾杯」（それは「杯の底を乾す」の意味だといわれた）という祝詞とともに，酒で祝杯をあげられていることに気づいた。その祝杯を飲む時にはひと飲みで杯の酒を空にするのが客の義務であり，杯はただちにまた一杯にされる。酒はわずかに温められてでてきて，装飾的な陶器のボトルからサーヴされる。ボトルは際限なく次々と運ばれ，多量の酒が飲まれる。後に私はアメリカ人の１人から聞いたことだが，祝杯をあげて，客に際限なく酒を杯（それは小さいものだが）で飲むことを強制するゲームは，全てこのようなディナーにおいては好んでなされるものであり，その目的はもちろん客を酔わせることにある。私のばあいには，それは完全に失敗に帰した。というのは，私が空にしなければならなかった沢山の酒の杯は，ほとんど私に影響を与えなかったからである。アバディーン生れであることが好都合なのである！日本人はアルコールが飲める能力を大いに称賛し，それを英雄的徳性の一つであると考えているようである。これは，彼等自身がこの方面で周知のように弱いということからきているのかもしれない。出席したかなり年配の人たちは酔った徴候を示さなかったが，たぶんそれは彼等が注意して飲みすぎないようにしたからだろう。だが，若い方の何人かは，彼等の行動に好ましくないものはなかったけれども，多少騒々しくヒステリックになった。私は大使館に戻ると，シーボルト夫人が親切にも私にたいへん美しい漆器をプレゼントしてくれたことがわかった。そのプレゼントは，多数の友人をひどく羨ましがらせた。早く就寝。　（続）

（経済学部教授）